

第34回泌尿器科漢方研究会学術集会

会長： 寛善行(香川大学医学部泌尿器科学教室)

会期： 2017/6/17 ～

会場： コクヨホール(東京都)

一般講演Ⅲ

座長： 昭和大学 小川 良雄

11. 泌尿器科領域で使用される八味地黄丸の副次的効果の検討

市ヶ谷ひもろぎクリニック¹⁾順天堂大学大学院医学研究科 泌尿器外科学²⁾○土井 直人¹⁾、渡部 芳徳¹⁾、堀江 重郎²⁾

西洋医学においては症状に対して個別的に処方がされ多剤併用となる傾向がある。しかし東洋医学においては異病同治という考え方により複数の諸症状を一剤で治療を行う考え方がある。今回、我々は八味地黄丸投与にて副次的な効果が得られた症例を経験したので症例報告とともに後ろ向きに八味地黄丸投与症例の検討を行った。

症例は69歳男性。数年来のうつ症状が認められ来院。採血にてテストステロンが319ng/dlでありAMSが43点のため男性ホルモン補充療法を開始。ハミルトンスコアは15点と軽度抑うつ状態であったが、治療開始後4ヶ月で5点まで低下した。採血にてテストステロンは597ng/dlまで回復したが、Hbが19.1と多血症が認められホルモン補充療法は中止した。東洋医学的には小腹不仁が認められたためLOHの治療として八味地黄丸の投与を開始した。投与一ヶ月後、家人から長年悩まされていた耳鳴りが服用後完全に消失したとの報告を受けた。治療開始後8ヶ月目の採血にてテストステロンは608ng/dlでありHbは18.3g/dlまで回復した。またこの時点で髪の毛が増え始め色が黒くなってきたとのことであった。

以上の経験を踏まえ、当院にて後ろ向きに八味地黄丸を投与された85例についてその副次的効果を調べた。LUTS、LOH症候群及び浮腫などの腎泌尿生殖器系の症状を認めたものは52例であった。そのうち腰痛、冷え、ほてり、耳鳴り、不眠、全身倦怠感などの不定愁訴についての効果検討を行った。泌尿生殖器系統で有効であった症例で副次的な症状も軽快したものは71.4%であった。一方で泌尿生殖器系で無効であり副次的症状の軽減率は33.3%であり両者には統計的な有意差を認めた(P=0.0065)。

今回の検討における副次的症状は東洋医学における腎虚に基づくものである。外来にて泌尿生殖器疾患の治療において八味地黄丸を投与する場合、これらの副次的症状を有する場合はその有効性が上がると考えられる。また異病同治の考え方から八味地黄丸単剤にて鎮痛剤、眠剤などを投与することなく軽快する可能性が期待される。